

## 4章

### 【問題】（演習）

出典：『うたたね』／信州大学・改

#### 現代語訳

道中目に止まる場所場所は多いけれど、「ここはどこ、ここはどこ」とも、身近に尋ねられる人もいないので、どここの野も山もただはるばると分けて行つたが、どこに宿をとつたらよいかわからず、一行の人の行くのにまかせてまるで夢路をたどるようであつて、日数が経過するにつれて、やはり慣れない田舎の長い旅路にすっかりやつれた我が身は、自分か他人か区別のつかないような茫然とした気ばかりがして、美濃と尾張の国の境に着いた。

洲侯とかいう、広々とひどく流れの速い大河がある。行き来する人が集まつて、舟を休めず往復する様子は、とても仰々しく騒がしく、恐ろしいまでに大声でわめき合っている。やつこのことで一行の主だった者はみな渡り終えたが、人々も興だの馬だの来るのを待っている間に、私は河の端に下りてたらずみ、つくづくといま来た方を見ると、見苦しい下賤な男たちが、汚らしいさまざまな物を舟に積み込みなどするうちに、何事であろうか激しく言い争つて、ある者は河に倒れて落ち入りなどするにつけても、見馴れずなんとなく恐ろしいが、このような渡し場のある河までが、都との間をすっかり隔ててしまっているの、いよいよ都の方ははるかに遠くなってゆくことだろうと思うにつけても、いつそう甚だしく涙も流れて堪えがたく、（都に）帰るような時さえわからない不安に、過ぎてきた日数もまだそんなに経たないのに、都に残る人々の行く末が気にかかり、恋しい気持ちもささまであるが、ここは『伊勢物語』で有名な隅田川の河原ではないので、都の人の安否を尋ねるはずの都鳥も見えない。

思ひ出でて……業平のことを思い出して、その名をしきりと慕わしく思う都鳥よ、その都鳥の姿も見えずあとかたも残らない川波に、ひとり都を思つて声をあげて泣こうかしら

解答

問1 ア 格助詞

- (イ) 断定の助動詞「なり」の連用形（比況の助動詞「やうなり」の連用形の一部）  
(ウ) 接続助詞

問2 自分の身の衰えを信じられない状態。

〔別解例〕長い旅路の身の衰えに茫然としている状態。

問3 B 大声を出してわめき合っている

D 声を上げて泣こうかしら

問4 作者の、いつ都に帰るかという期日さえわからない不安。

問5 身の終はり

問6 ひな

問7 『伊勢物語』

出典：『土佐日記』／名城大学・05年・改

## 現代語訳

二十七日。大津から浦戸をめざして舟を漕ぎ出す。このように（帰京）する者の中で、（ある人は）都で生まれた女の子が、任国（の土佐）で急に亡くなってしまったので、近々の帰京のための旅立ちの準備をみても、（気持ちに沈んでいるために）何も言わない。都へ帰るのに、（ある人は）女の子がいなことだけを悲しみ恋しがっている。そこに居合わせた人々も（同様に悲しみを）こらえきれない。このような中である人が書いて出した歌、

都へと……やつと都へ帰れると（うれしく）思うはずなのに、何となく悲しいのは、任国の土佐で亡くなってしまい、都に一緒に帰ることのない人（女の子）がいるからであったのだなあ

またある時には、

ある物と……今も娘が生きているものと思い、（娘が死んだことを）何度も忘れては、その娘を、どこへ行ったのかと探すことは悲しいことであつたなあ

とうたっている間に、鹿児の崎という所に、国司の兄弟、さらに、その他の人の誰やかれやが、酒やら何やらを持って追いかけて来て、磯に馬から下りて座って、別れ難いという思いを（ある人に）言う。国司の官舎の人々の中で、この（見送りに）来た人々こそ、誠意があるというように、自然と口に出し声をひそめる。このように別れ難い思いを言って、見送りに来た人々が、漁師がみんなで力を合わせて網を担い出すように、この海辺で全員で声を合せて歌い出した歌、

をしと……別れるのが名残惜しいと思うあなたが（もしかするとこの土地に）留まってくれるかもしれないと思い、葦鴨のように、大勢でやって来たのですよ

とうたつて（ずっと）そこにいたので、とてもはなはだしく感動し、都へ帰る人（ある人）が詠んだ歌、

棹させど……棹をさしても、その底の深さを計り知ることができない海のように、深い思いやりのある心をあなた（たち）に感じることだなあ

と言ううちに船頭はしみじみとした趣もわきまえずに、自分は酒を飲んでしまったので、早く出てしまおうとして「潮が満ちてしまった。風もきつと吹くにちがいない。」と騒がしくせきたてるので、(仕方なく都へ帰るある人が)舟に乗ってしまおうとする。このときに、そこに居合わせた人々は、別れの時に応じ漢詩など、その場にふさわしいものを朗詠する。また、ある人が、(ここは)西国であるのに、(東国地方の)甲斐の民謡などを(場違いに)うたい、このように歌うのに、「(歌の声に感動して)舟屋形に積もった塵も舞い上がり、空を流れる雲もそこに漂っていたよ」と言っているようだ。今夜は浦戸に泊まる。藤原のときぎねや橘のすえひらや、他の人々が後を追いかけてきた。

解答

問 1 (ハ)

問 2 京にて生まれたりし女子

問 3 都へ帰る人との別れを惜しみ見送りにやって来た人々の誠意ある深い思いやりのある心。

問 4 (a) 意志の助動詞「ん(む)」の終止形

(b) 推量の助動詞「べし」の終止形

(c) 推定の助動詞「なり」の連体形

問 5 ゆく人

問 6 ① 紀貫之 ② 土佐日記

問1 主語を確認する問題である。傍線部(イ)の前に、この歌が詠まれた事情が述べられている。都をめざし「ある人」(歌を詠んだ人)を含む人々が舟を漕ぎ出すが、京の都で生まれた女の子(ある人の娘)がこの任国の土佐の地で亡くなつてしまい、一緒に連れ帰ることができず、ある人をはじめとしてそこに居合わせた人々も皆嘆き悲しんでいる。このような事情の中で「ある人」が読んだ歌の中で示された「帰らぬ人」とは「ある人の娘」のことである。そして(ロ)も、別のあるときに「ある人」が詠んだ歌の中に出てくる「なき人」なので、(イ)と同じ「ある人の娘」である。従つて一つだけ指し示す内容が違っているのは(ハ)である。

問2 この問題は、すでに問1を解く段階で同時に理解されている問題である。あとは二つの指し示す同一内容(ある人の娘)を表す表現としてどこを抜き出すか、である。傍線部(イ)・(ロ)ともに上にある修飾部が「帰らぬ」「なき」と言ったように「人が亡くなったことを表すもの」である。従つて抜き出す箇所もそのような意味を含んだところがよい。本文では「京にて生まれたり、し女子」のところが、「女子」が都で生まれたと表現することで過去のことを示し、しかし、それは同時に都では生まれ生きていた女の子だったのに、「ある人」が土佐の国の長官として任官するために一緒につれていつていたが、その任国で亡くなつてしまい帰京する現在、はもうこの世にはいないのだ、ということに対比的に示している。従つてただの「女子」ではなく説明を受けた「女子」を抜き出す方がよいので「京にて生まれたりし女子」のところが解答となる。

問3 この傍線部(ニ)も和歌の中に含まれているものを具体化する問題であるので、和歌の詠まれた事情をふまえて答えねばならない。そこでこの歌が、いつ、どこで、誰により、どのような状況や出来事のもとで詠まれたのかを見ていくと、土佐を出発し、しばらくして鹿兒の崎というところについたところ、その地に、自分(ある人)たちと別れを惜しむため追いかけて来てくれた国守の兄弟たちと、「ある人」が別れの宴でやりとりをしていて彼らに対して抱いた思いを詠んだものである。もう少し詳しく見ると、「ある人」を見送るために来た国守の兄弟は、別れの宴で心の底から「別れ難い」思いを述べて、さらに皆で歌った歌は「別れるのが惜しいあなたが、我々が来て引きとめればこの地に留まってくれるかもしれないと思つてここに来ているのです」という内容のもので、単なる社交辞令などではなく、「ある人」はその誠意に感動し、また去りゆくものにできうる限りのことをして送り出そうとする姿に彼らの思いやりを感じているのである。それを和歌で海と同様に計り知れないほどの「深い心」と表現していると捉え

て説明する。

問4

①は、ナ行変格活用動詞「去ぬ」の未然形に接続している「ん（む）」であるが、たくさんある意味の中のどれをとるかである。この動作は楫取り自身の動作であるので「意志」でとり、活用形の方は「と」の前なので終止形と判断できる。「と」「とて」「など」の前では文が完結しているのが普通である。

②は力行四段活用動詞「吹く」の連用形に、強意の助動詞「ぬ」の終止形に接続している「べし」であり、これも①と同様に、どの意味でとるか、であるが、「吹く」の動作主は「風」なので「推量」でとり、活用形の方は文末で用いられていることから終止形と判断する。

③はこの三問中もつとも難しい。まず③が接続している「言ふ」が終止形ならば、伝聞もしくは推定の助動詞であり、連体形ならば断定の助動詞である。ここは「ある人」が甲斐歌をうたっているところに居合わせた人々が、その歌を聞いていて、その声に感動していることが、「ある人」には、彼らの語る声で推測されるのである。従って③は八行四段活用動詞「言ふ」の終止形に接続している推定の助動詞「なり」であり、活用形は上に強意の係助詞「ぞ」があるので連体形である。

問5

傍線部④の意味は（楫取りにせきたてられ）「舟に乗ってしまおうとする」である。では誰が舟に乗るのか。当然この土佐から離れて行く人であり、それを本文中では「ゆく人」と表現している。

問6

文学史の問題の中には、その書き出しでその作品名を問うという形式のものがあるので教科書に出て来る有名作品の書き出しは知っておく必要がある。

## 5章

### 【問題】（演習）

出典：柳宗元『三戒』「永某氏之鼠」／東京学芸大学

#### 書き下し文

是に由りて鼠相告げ、皆某氏に來り、飽食するも禍無し。某氏の室に完器無く、櫛に完衣無し。飲食は大率鼠の余なり。昼は累として人と兼行し、夜は則ち竊み嚙み鬪暴たり。其の声万状にして、以て寝ぬるべからざるも、終に厭はず。数歳にして某氏居を他州に徙す。後人來りて居るに、鼠の態を為すや故のごとし。其の人曰く、「是れ陰類の惡物なり。盜暴尤も甚だし、且つ何を以て是に至れるや」と。五六猫を仮り、門を闔ぢ瓦を撤り、穴に灌ぎ、僮に購ひ羅にて之を捕へしむ。鼠を殺すに丘のごとし。之を隱処に棄つるに、臭数月して乃ち已む。嗚呼、彼其の飽食するも禍無きを以て恒にすべしと為せるか。

#### 現代語訳

そこで鼠たちは（お互いに）知らせあい、皆某氏の家にやって来て、（某氏の家の中で）腹いっぱい食べてもとがめられることはなかった（＝退治されるような災難はおこらなかった）。（だから）某氏の部屋には（鼠にかじられていない）完全な器物はなく、衣桁にも（穴のあいていない）完全な衣服はかかっていないありさまだった。（そして）飲み物や食べ物はだいたい鼠の食べ残しであった。（鼠は）昼間はごろごろと人について行き、夜になると盗んだりかじったり大暴れした。その音はさまざまにひびき、寝ることができないほどであったが、（某氏は）全く嫌がることはなかった。数年たつて某氏は他の州へ引越した。次の人が来てそのあとに住んだが、鼠のふるまいぶりはもとのままであった。その人は言った、「鼠は暗闇で活動する悪党だ。とりわけひどく盗んだり暴れたりする。いったいどうしてこうなるまでになったのだろう」と。（そこで）猫を五、六匹借りてきて、門を閉じ、瓦をはずし、（鼠の棲む）穴に水を注ぎ、下僕に賞金を出して網にかけて鼠を捕獲させた。殺した鼠は小山ほどにもなった。それを物陰に捨てておいたところ、その

悪臭が数か月もかかってやっと消えるほどだった。ああ、鼠たちは腹いっぱい食べてもとめられないということを、いつまでも続けることができると考えていたのだろうか。

**解答**

問1 (1) 〓 以前のまま、家中を好き放題に食べまわり、騒ぎ続けた。

(2) 〓 どうして、このように昼でも夜でも家中を走り荒らしまわるという状態にまでなったのであろうか。〔いずれも解答例〕

問2 A 〓 ついにいとわず B 〓 すなわちやむ

問3 自分に都合の良い状況がいつまでも続くことはないから、自身の分をわきまえて謙虚に生きることが大切だ。〔49字・解答例〕

出典：范曄『後漢書』「卷八十四 列女伝第七十四」の一節 / 立教大学 文学部 A 96 年

## 書き下し文

呉の許升の妻は、呂氏の女なり、字は榮。升少きとき博徒たり、操行を理めず。榮嘗に躬ら家業に勤めて、以て其の姑を奉じ養ふ。数ば升に勧めて学を修めしめ、善からざることに有る毎に、輒ち涕を流して進め規む。榮の父忿り積もり、乃ち榮を呼び改めて之を嫁がしめんと欲す。榮歎じて曰く、「命の遭ふ所なれば、義として離す無し」と。終に帰るを肯んぜず。升感激して自ら励み、乃ち師を尋ねて遠く学び、遂に以て名を成す。尋いで本州の辟命を被り、行きて寿春に至らんとし、道に盜の害する所と為る。刺史尹燿盜を捕へて之を得、「得たり」。榮喪を路に迎へ、聞きて州に詣り、隣人に甘心せんことを請ひ、燿之を聴す。榮乃ち手づから其の頭を断ちて、以て升の靈を祭る。

## 現代語訳

呉の許升の妻は、呂氏の娘であり、字「呼び名」は榮（である）。（許）升は若いころ（は、まともな職にも就かない）ばくち打ちだったのであり、素行を磨かなかった（「素行不良であった」）。榮はいつも自分から進んで（嫁ぎ先の）家の仕事に精を出し、（仕事にいそむことに）よって彼女の姑に仕えて世話をした。（また）たびたび（許）升に勧めて学問を習得させ（ようとしたが、許升は聞き入れもせず）、（許升が）よくないことをすることに、いつも涙を流してその前に進み、諫め（て懸命に素行を正すよう説得する）。榮の（実の）父は憤りが鬱積し、そこで（娘の）榮を（実家に）呼び返して再度彼女を（別の男と）結婚させようとした。榮は溜め息をついて言うことには、「（夫の許升とは）運命が出会わせたまのなので、人の守るべき道として（許升と）別れることはありません」と（言った）。（榮は）とうとう（実家に）帰ることを承知しなかった。（これを聞いた許）升は感激して自分から（改心して）奮い立ち、そこで（学問の）師を求めて遠くに遊学し、かくして（学問を修めたことに）よって名声を得た。まもなく（許升は）故郷の（呉）郡からの取り立てを受けて、（遊学先から故郷へと）旅して（安徽省の）寿春（の町）に到達しようとし（たのだが）、途中で盜賊に殺されることとなってしまった。州郡を監察する役人の尹燿が（許升を殺害した）盜賊を逮捕して身柄を拘束していた。榮は（許

升の) 柩を往来で迎えて(もらい受け)、(その場で犯人逮捕の話) 聞いて(そのまま尹燿のいる) 州(の役所) に参上し、仇に対し  
て思う存分に怨みを晴らしたい(という) ことを願い出て、燿はそ(の栄の仇打ちの願い) を聞き入れ(て認め) た。栄はそれで自分  
の手でその(犯人の) 首を斬り落として、それを(亡き許) 升の霊前に供えて(許升を) 弔った。

解答

問 1 (a) 〓 あざな (b) 〓 しばし 「ば」 (c) 〓 すなわ 「ち」

問 2 1

問 3 3

問 4 許升は帰郷の道中で盗人によって殺された。〔20 字・解答例〕

問 5 2

問 6 1

解説

問 1 訓読の問題。(a) は「あざな」と訓み、「呼び名・別名」の意味。ここでは「許升の妻」 〓 「呂氏の娘」という人物についての紹  
介があり、その人の「字」が「栄」であるとされている。以降の文ではこの人が「栄」と呼ばれており、ここでは「呼び名」の意  
味であるとわかる。(b) については、直後の「勸」を修飾している(つまりは副詞的な用法である) ことから「たびたび・数多く」  
の意味であると推測できる。この意味にあてはまる訓読みで、「バ」という送り仮名に適うのは「しばしば」。(c) は「すなはち」と  
訓み、「いつも・そのたびごとに」の意味を持つ字である。ここでは「平仮名・現代仮名遣い」と指示されているので「すなわ

(ち)でよい。なお、同じ訓読みを持つ字に「則」「即」「乃」「便」などがあるが、いずれも意味は微妙に異なる。各自調べておかれるとよい。

問2 問1の(c)との関連で考えれば、この部分が「……たびごとに」「……するといつも」の意味であることが推測でき、その意味に適う選択肢1を選ぶことができる。

この「輒」のニュアンスがわからずとも、漢文の文型・語法についてのちょっとした知識があれば、選択肢をより分けていく程度の作業は可能である。そもそも「不」は必ず直後の語を打ち消すはたらきを持つ返読文字であるから、「不善」はひとまとまりの語となる。したがって3のように「不」と「善」を離して訓む書き下しはあり得ない。また、この傍線部分においては動詞的なはたらきをする文字が「有」であるから、その後の「不善」はこの「有(あり)」の目的語もしくは補語となる。いずれにしてもこの「不善」は名詞句であり「よからざること」と訓むのが適切だ、というふうに判断できる。その意味で選択肢2・4は不適切。

問3 問2と同様に返読文字「不」の用法に注目。これは必ず直後の語を打ち消すはたらきを持つているのだから、ここでは「肯」をしなかった、という意味になる。「肯」は「がえんズ」と訓み、「承諾する」「イエスの返事をする」の意味を持つ。「肯定」「首肯」などの熟語を想起されたい。したがって「不肯」は「承諾しない」ということ。この意味に相当する内容を持つ選択肢は3(「承知しなかった」)。1の「相談しようとはしなかった」や2の「もう実家に帰らなかった」や4の「帰ろうとはしなかった」ではないずれもこのニュアンスを欠く。

あるいは、傍線部冒頭の「終」が「つひに」と訓み、「最終的に」「結局は」の意味であることから選択肢が絞れていく。1の「とうとう」や3の「結局」はこの意味に適っているが、2の「そう言うてから」や4の「無理に」ではこの意味を欠く。

このように、部分解釈の選択肢問題にあたっては、傍線部分(およびその関連部分)のあるポイントに注目し、そのポイントの内容に相当することがあるか否か……で選択肢をより分けていくとよい。たいていは、正解の選択肢を軸にして、他の選択肢は少しずつ少しずつ外れているものである。

問4 現代語訳を書くに際して注意したいことは、「逐語訳を基本にする」ということだ。書き下し文の語順は変えず、まずは一対一の置き換えを試してみる。そしてできた訳文に不自然なところがあつたり、意味が判然としないところがあつたりした場合には、適宜他の語を補うか、意味を変えずに言い換えるか、を試みればよい。

こゝでは「道」↓「盗」↓「害」↓「所」↓「為」の順に口語に置き換えていくことになるわけだが、注意したいのは「為A所B」の受身の句形が用いられていることである（「所」が受身の助字）。これは「AによってBされる」という意味の、定型的な表現である。したがって、ここの意味は、「道」で「盗」によって「殺」された、ということになる。これを軸に、適宜表現を補うなり置き換えるなりしていけばよい。

「道」とは、直前の「本州辟命、行至寿春」という表現から推せば、故郷の町・寿春へ向かう道すがらの意味であるとわかる。また、この部分の主語は前行にあるように「升」。したがって「許升が帰郷の道中で」というふうになれば、意味がクリアになる。「盗」は、直後に「刺史尹耀」がこの「盗」を捕らえたという記述があることから推して「盗人」「盗賊」等の意味に取るのが妥当であろう。

問5 選択肢がいずれも「みち」「ひつぎ」「むかへ」という語を含んでおり、これらがそれぞれ「路」「喪」「迎」に相当している。訓読をするにあたっては、素直に返り点の振られてあるとおりに読んでいけばいい。「喪」↓「於」↓「路」↓「迎」となる。この「路」↓「迎」を「みちにむかへ」ときちんと訓んでいる選択肢は2しかない。

問6 直前に「栄」が「請甘心讎人」、つまりは「かたきに対して思う存分怨みを晴らす」ことを希望し、「耀」がそれを許した、とする記述があることに注目。その上で「栄」が「其」の頭を断ち切った、というのだから、ここでいう「其」とは「讎人」を指すことになる。夫・許升を殺した相手の盗人を仇に思う「栄」は、自らその相手の首を切るという私刑に打って出たのである。







|      |  |
|------|--|
| 会員番号 |  |
|------|--|

|     |  |
|-----|--|
| 氏 名 |  |
|-----|--|